

# 和歌森太郎の歴史教育の構想

——日本史像の地政学的配置をめぐって——

日本学術振興会特別研究員 小 国 喜 弘  
(学校教育開発学コース)

Folk History Education of Taroh Wakamori Examined

——A Critical review on Geopolitical Images and conceptions of Japanese History——

Yoshihiro KOKUNI

The purpose of this paper is to focus on the images of Japanese history asserted by Wakamori Taroh, an historian (1915-1977), and to clarify the characteristics in his theory on education. In the latter half of 1940s and to the 1950s, Wakamori intended to provide junior high school students with new images of Japanese history which he believed suitable for the newly-introduced democratic society after the World War II. However, the images of Japanese history presented by him was affected by Japanese Folklore, which was transformed singular features embedded in villages and towns into universal factors to form Japanese history. Therefore, his view resulted in representing Japanese nationals as homogeneous. During the war, he was involved in studies in Kokumin Seishin Bunka Kenkyujyo, an institute where Japanese Ideology were invented to justify World War II. In post war days, as he remained the basic flame of Japanese nationalism, his image of Japanese history, therefore, lacked respect for otherness of Asian people.

## 目 次

はじめに

第一節 「経験としての歴史の教育」と「展望としての歴史の教育」

第二節 戦時下の民俗学と国民精神文化研究所

(1) 戦時下における民俗学の政策学への転換

(2) 国民精神文化研究所「国民伝統調査」

第三節 歴史教育論における地政学的配置

(1) 列島内部の地政学

(2) 列島外部の地政学

終わりに

はじめに

本研究は、和歌森太郎の歴史教育論を素材とし、第二次世界大戦後の民俗学が学校教育を通して創出しようとした日本史像の特徴を、主に地政学的配置に注目して明らかにすることを目指している。

1940年代後半から50年代にかけて、和歌森太郎<sup>1)</sup>は、民俗学の成果と方法を社会科、特に歴史教育へと受容することに力を注いでいる。具体的には、1946年に文部省著作教科書『くにのあゆみ』が刊行されると「大衆のくらしの歴史を述べていない」ことを批判して<sup>2)</sup>、翌1947年に民俗学の成果を生かした『たみのあゆみ』(国民図書刊行会)を、1948年には『生活の歴史』(高山書院)を出版している。また1947年に結成された中等国史教科書編纂委員会には副委員長として参加、委員会頓挫後の1950年には中学校日本史教科書『日本の成長』(実業之日本社)を単独執筆し、その教科書は初年度に約100万人の中学生に読まれることとなった。他にも和歌森は、教師向け歴史教育雑誌『社会科歴史』(実業之日本社)を主宰し、さらに『日本史教育の理論と実際』(小石川書房、1949)『歴史教育論』(金子書房、1950)『歴史教育法』(金子書房、1954)等、歴史教育に関する数多くの理論書の執筆を手がけている。

和歌森の課題は、「民主主義社会の建設」にふさわしい新たな日本史像を子どもに獲得させることにあった。そ

のために、中学校社会科のための歴史教育として、一般社会科で学習される「経験としての歴史の教育」と国史科<sup>3)</sup>で学習される「展望としての歴史の教育」という二つの歴史教育が提唱されている。民俗学の研究方法を歴史教育の方法へと受容した「経験としての歴史の教育」では、従来顧みられなかった個々人の「経験」に歴史を見出し、子どもに個人史を綴らせることを目的としている。さらに、民俗学の成果を教育内容へと受容した「展望としての歴史の教育」では、個々人の多様な「経験」を含んだ「たみのあゆみ」として描き直した日本通史を子どもに教えることを目的としていた。二つの歴史教育の提唱を通して和歌森は、個人史と共同体の歴史(日本通史)とをいかにして折り合わせるかという課題に挑戦しようとしている。和歌森の理想とする民主主義が、「自由に互に保障しあい、かつ各人のそれを互に認めあつて、社会全体のために個人個人誰もが責任をもてるようにしあう」という、個と全体との調停を課題としていた点を踏まえれば、和歌森の歴史教育論は、民主主義社会にふさわしい歴史認識を子どもに獲得させようと摸索するものであった。

しかし和歌森においては、「日本人全般の生活発達史」が最終的に子どもが獲得すべき日本史像であり、「経験としての歴史の教育」を通して創出される個々人の多様な歴史経験は、単一の「生活発達史」の中に回収されていたのである。

個人史の個別性を失うことなく、日本通史をいかにして創造するかという和歌森の挑戦を未完なものへと押し止めてしまったものは何だったのだろうか。そのような問いに対して、本研究では、和歌森が戦時下において携わっていた民俗学と「大東亜文化建設研究」という、地理的表象に関わる二つの研究が、戦後の歴史教育論にどのように継承されたのかを検討することによって明らかにしたい。地方差を時代差と見なす民俗学の重出立証法を「経験としての歴史の教育」の教育方法に援用したことで、子どもの「経験」は、日本史の発達段階の一つに位置付けられることとなった。さらに和歌森は、戦時下に国民精神文化研究所で「大東亜文化建設研究」に携わることを通して、東亜の様々な地域に住む民族が日本人の「心意」によって統合可能であるとする仮説を獲得し、それを無意識の内に戦後の歴史教育論に持ち込んでいたのではなかったろうか。

ところで、和歌森太郎の歴史教育論を検討した先行研究としては、『和歌森太郎著作集 13 歴史教育の理論』の解説として執筆された佐藤伸雄「戦闘的リベラリストとしての歴史教育者」と加藤章「和歌森太郎と社会科歴

史論の展開」がある<sup>4)</sup>。佐藤伸雄は、和歌森の歴史教育論の特徴として、「発展史観」をとる点において「一貫していた」こと、「唯物史観には有効性を認めつつも、一定の批判をもった」ことを指摘している。また加藤章は、歴史科独立論を主張する歴史学者が多かった当時において、「歴史学者の立場から真っ先に」社会科を「支持」した点に和歌森の歴史教育論の積極性を見出した。その上で、和歌森による歴史教育論の特徴として、「民俗学的視点」を取り入れて「現代から倒叙的にさかのぼってたずねていく」「経験としての歴史教育」と、「全体的な展望としての歴史」を教える「展望としての歴史教育」という二つの歴史教育が構想された点を指摘していた。

さらに佐藤や加藤の指摘を受け継ぎ発展させたものとして、梅野正信による一連の和歌森研究を指摘することができよう。その中でも中心的な論文「歴史教育独立論と『社会科歴史』論」で梅野は、和歌森の歴史教育論が「民主的社会建設の担い手」を作ることを鮮烈に意識した「初期社会科」の「積極的側面を活かした歴史教育」論である点を評価する。梅野によれば、社会科問題協議会の一員であった和歌森は、1950年代の文部省による社会科改訂と道徳科復活の動きに際して、多くの歴史学者と共に反対したものの、歴史学者が事実上歴史教育独立論を取る中で、和歌森の主張は「社問協活動において十分に生かされたとは言えない」のであった<sup>5)</sup>。

これらの先行研究を通じて明らかにされた、和歌森太郎の教育論の歴史的位置を踏まえた上で、本研究は、和歌森の歴史教育論における日本史像の特徴を、列島内部と外部の地政学的配置に注目して明らかにすることを目指している。地政学的配置を問題にするのは、和歌森の歴史教育論が、個人の「経験としての歴史」を含む列島内部の様々な地域の多様な歴史をいかにして日本史へと統合するかという地理的権力(geo-power)に関わる問題に直面していたからである。

以下、本研究の課題を三節構成で明らかにしたい。第一節では、和歌森が、個人史と日本史とをいかにして接合するかという問題を提起することを通して、民主社会にふさわしい歴史認識を摸索しようとしていたことを明らかにしたい。第二節では、和歌森の歴史教育論における日本史像の特徴を明らかにする前提作業として、戦時下に和歌森の携わっていた日本史研究を取り上げて検討することにしよう。続く第三節では、和歌森の歴史教育論において、日本史像がどのように描かれていたのか、教科書の分析を踏まえて明らかにしてみたい。

## 第一節 「経験としての歴史の教育」と「展望としての歴史の教育」

先行研究において指摘されているように、和歌森の歴史教育論の最大の特徴は、「経験としての歴史の教育」と「展望としての歴史の教育」という二つの歴史教育を主張した点に求めることができよう。しかしこれら二つの歴史教育を提唱した意義は、①現在から歴史に遡る倒叙法と②古代から現代へ至る通史学習法という二つの相互補完的な学習法の提示という、加藤章らの指摘した意義に止まらない。以下では、和歌森において二つの歴史教育が、彼の理想とする民主主義を実現するために不可欠なものとして捉えられていた点に注目したい。和歌森が理想とする民主主義は、「各人が同等に人権を保障されたうえで、それぞれが個性ないし個性的な能力を十分発揮できるように、お互いに援け合っていく。その個性の発揮された成果が、社会の進展に役立つようにしていく」というものだった<sup>6)</sup>。個と全体との齟齬をいかにして調停するか、このように民主主義の課題を考えたとき、和歌森にとって日本はいかに未熟な社会であった。和歌森によれば、「これまでの日本には、家と国家との社会のみがあっていわゆる『社会』はなかった」のであり、それゆえ「日本人」は「公共社会人としての態度が薄弱」であったからである<sup>7)</sup>。個人史と共同体の歴史とをいかに折り合わせるかを子どもに追求させることを通して、和歌森は個と全体の調停を目指す民主主義社会にふさわしい歴史像を子どもに創造しようとしたのである。

それでは、「経験としての歴史の教育」と「展望としての歴史の教育」という二つの歴史教育を提唱することで、和歌森は、個人史と日本通史とをいかにしてすりあわせようとしていたのだろうか。

一般社会科での学習を想定して主張された「経験としての歴史の教育」は、「すべての経験は歴史的経験」であるという前提に立ち、現実の生活がいかに過去に「規定」されているかを対象化すると共に、「次の歴史的経験の予科」として「未来への生き方の構想」を子どもに摸索させようとするものであった。

問題は、「すべての経験は歴史的経験」であるという前提を徹底させれば、「何を歴史的経験として受け取っているかは、人によつて異なることもある」中で、無数の瑣末な歴史が書かれる結果を招きかねない点にあらう。そのような事態を回避するために、和歌森によって提唱されたのが今一つの「展望としての歴史の教育」であった。国史科で学ばれる「展望としての歴史」は、経験によっては見えない「歴史的規定」に目を見開かせることを目

的としたものであり、和歌森にとっての理想的な歴史教育は、「経験としての歴史」と、「展望としての歴史」の間の往復運動を通じて歴史意識を深化させていくことにあった<sup>8)</sup>。すなわち、子ども個々人の「経験としての歴史」の意味は、参照軸としてのもう一つの「展望としての歴史」——和歌森の場合、民族史としての日本史——を必要とする。「展望としての歴史」を参照することを通して、個人史の意味はより深められたり、書き換えを迫られることになるだろう。さらに列島内部に住む人々が、アイヌ、沖縄、在日朝鮮人や中国人を含んでいたことを考えるならば、彼らの描く個人史を突きつけることを通して、参照軸としての「展望としての歴史」も複数の日本史として新たに描きなおされる必要が生じることとなるだろう。和歌森は、彼の民主社会像から導かれる日本史の複数化という課題に対し、歴史教育論の中でいかなる回答を準備していたのだろうか。そのことを詳しく検討する前に、次節では、先行研究が触れてこなかった、戦時下の和歌森の研究活動を取り上げ、そこで和歌森がいかなる日本史像を構築しようとしていたか検討してみよう。

## 第二節 戦時下の民俗学と国民精神文化研究所

以下では、戦時下における民俗学の状況と、国民精神文化研究所での和歌森の民俗調査研究の二つに焦点をあてて考察を試みよう。

### (1) 戦時下における民俗学の政策学への転換

1941年6月以降、東京高等師範学校講師であった和歌森は、柳田国男に師事し、その邸宅（東京都世田谷区成城）に出入りを始めている。和歌森が民俗学に出会った時には、以下に見るように、民俗学は野の学から政策学的な色彩の強いものへと転換し、それに伴って、日本人の民族性の究明という課題を従来よりも強調し始めている。

柳田の門人で昔話研究の関敬吾は、『民間伝承』1943年4月号の巻頭言で、民俗学の政策学への転換を次のように語っている。

最近、日本民俗学研究は大なる躍進を遂げようとしてゐる。それは民俗学に対する社会の関心と要求とが急にたかまり、研究を刺激したことも、その一因であらう。最近の信仰問題、国語問題、また当面の衣食住の問題にせよ、何等かの意味に於て、その歴史的基礎を必要としないものはない。こゝに従来閑人の物好き仕事といはれた日本民俗学の目標と、現在の社会的要求とが一致した

ためである<sup>9)</sup>。

総力戦への国民の動員がその前提として国民意識の高揚を必要としたのだとしたら、民俗学は日本人の「歴史的基礎」の解明を通して日本人の民族精神へと迫り、国民意識の覚醒に一役買うこととなった。

関が述べるように、もはや民俗学は「閑人の物好き仕事」ではありえない。『民間伝承』誌によれば、1941年には新潟翼賛会支部や大政翼賛会福井県支部で民俗学講座が開催されている。特に福井県支部では「県下の全村から一名以上召募される予定」とされ、県下の全村の代表の出席を義務づけた官製講座として民俗学講座が開催されている。また同1941年から翌42年には、大政翼賛会の委託により配給制度実施のための基礎的な調査として、日本内地の「食習調査」が実施された。

さらに言えば、民族性を明らかにしようとする民俗学には人々の期待が集まり、民間伝承の会の会員数は戦時下に激増している。機関誌『民間伝承』1944年6月号は、その間の事情を次のように伝えている。「昭和十年秋僅かに百四十名余りの同志によつて創設せられたる本会は、其後長足の発展を遂げ、今日全国各県はもとより満州北南支に亘り二千数百名の会員を有するに至りました。殊に大戦開始以来は一入熾烈なるものがあり、昨年度の入会者数は約八百名を数へました」。

民俗学が民族性の究明を以前にも増して重視したことは、「日本人」の一体性がより強調されることになったことでもある。柳田国男に即していえば、既に多くの論者によって指摘されているように、民俗学提唱以前、郷土研究時代（1910年代）の柳田は、毛坊主や巫女、木地師などに焦点をあてることを通し、「平地人」から排除されてきた山の中の漂泊民や被差別部落の人々といった、「平地人」以外の人々への関心が濃厚に存在した。それに対し民俗学を提唱する1930年代以降の柳田は「平地人」としての「常民」の解明に専ら関心を寄せ、異族への関心は喪失する。ただし、1930年代の柳田は生活の変遷に関心を寄せ、例えば1931年刊の『明治大正史世相篇』で、前近代から近代にかけての色・音・臭いの変化を描き出したように、「日本人」が前近代と近代ではいかに異なる存在であるのかを具体的に示そうとした。しかし、戦時下（1940年代前半）の柳田は、「日本人」の「固有信仰」の解明を通して、「日本人」の不変性と起源を明らかにする作業へと関心を移行させることとなったのである<sup>10)</sup>。

このように、和歌森が柳田に師事した時点において、民俗学は、政策学的色彩を強め、「日本人」の民族性の究明をはっきりと課題に据えていた。さらにいえば、和歌

森は、以下に見るように、数多くの民俗学者の中で最も深く国策に関与した民俗学者となったのである。

## (2) 国民精神文化研究所の「国民伝統調査」

和歌森は、柳田邸に出入りを始めて一年後の1942年6月に柳田国男と柳田の娘婿堀一郎の紹介によって国民精神文化研究所の所員（嘱託）になっている。時に和歌森26才であった。和歌森が研究所で担当したのは、「国民伝統調査」という全国の神社の民俗学的調査である<sup>11)</sup>。この調査は、和歌森を国民精神文化研究所に紹介した堀一郎（当時、同研究所助手）が取り組んでいた「東亜宗教の課題」研究の一環として企画されている。堀一郎と法学者増田福太郎との共著『東亜宗教の課題』は、国民精神文化研究所で企画された「大東亜文化建設研究」の一冊として、和歌森が研究所の嘱託となった1942年に出版されている。この研究は、日本各地の「氏子の行事と、進出せらるべき土地と土着民の信仰感情との間の綿密な考察が払はるれば一層効果がある」という記述にうかがえるように、「東亜」における「土着信仰」と日本におけるそれとの共通性を明らかにし、日本の「神社進出」を通して、東亜の宗教的統合を図るという「東亜宗教工作」を課題としていた<sup>12)</sup>。皇国観念による東亜の統合ではなく、東亜の人々の心性の共通性によって人的統合を図ろうとする点からすれば、堀らの構想は、大東亜共栄圏構想の中でもより根底的な東亜の統合を目指すものであったといえる。

日本人の「土着信仰」によって東亜の宗教的統合を「工作」しようとする堀らの研究は、和歌森が従事した「国民伝統調査」による全国的な氏神調査によって完成する。『和歌森太郎著作集』の年譜によれば、和歌森は1942年には「鹿児島県下、島根県下に長期滞在」し、さらに空襲の激しくなり始めた1944年になっても「鹿児島県、島根県、山形県、青森県下」に民俗採訪に出かけ、日本人の「土着信仰」の究明を通して、東亜への「神社進出」の基礎的資料を提供しようとしていた。

国民精神文化研究所での研究活動を通じて和歌森は、民俗学と「大東亜建設研究」という、以下にみる二つの地政学をいかにして統合するかという新たな課題に直面することとなった。すなわち民俗学は、地方差を時代差に還元し、列島内部の多様な民俗を「国民生活変遷誌」へと還元しようとする重出立証法を基本的研究法としている。重出立証法によって、日本内地の様々な民俗は、いったん「日本人」の民俗として均質化された上で、変遷過程に位置付けられることで、民俗間の現実の差別を歴史叙述の中に再確認しようとする側面をはらんでい

る。それに対して「大東亜文化建設研究」は、列島外部の地政学として機能している。すなわち「大東亜共栄圏」の理念創出のために、米英を植民帝国として規定し、米英の侵略の危機にさらされつつある地域として東亜地域の共通性を浮かび上がらせ、そこにおける日本の指導原理を探ろうとするものであった。また、日本の指導原理を確認することは、東亜内部への差別を正当化しようとするものでもあった<sup>13)</sup>。

付け加えれば、民俗学と大東亜共栄圏構想という二つの地政学の結合は、堀や和歌森の独創ではなく、柳田国男にも共有されていた。川村湊は、戦時下の柳田が「大東亜民俗学」を構想し、日本民俗学の研究対象を大東亜共栄圏内に拡大し、「日本民俗学を中心とした“華夷秩序”としての植民地の民俗学」を樹立する可能性を検討していたことを指摘している<sup>14)</sup>。「一国民俗学」を自称し、日本列島以外へ関心を持たないかみえる民俗学と、既存の国民国家の範疇を越え、東亜の統合を模索する大東亜共栄圏構想とは、一見接点を持たないように感じられる。しかし、民俗学と大東亜共栄圏構想は、共に人々の前近代的な生活とその深層に潜む心性を問題にし、彼らの主体的な統合を模索する点において共通の基盤に立っていた。

和歌森を国民精神文化研究所に紹介したのが柳田であったこと、1943年に柳田が和歌森や堀らと共に長野県東筑摩郡での氏神調査を計画し、同郡の教育会に協力を依頼していることを踏まえれば<sup>15)</sup>、柳田も「東亜宗教工作」に一定の理解と協力を示していたことがうかがえる。だとすれば、柳田の「大東亜民俗学」は、一民間学者の私的構想という、川村湊の指摘した段階に止まらず、国民精神文化研究所での堀や和歌森の調査研究を通して、大東亜共栄圏構想への具体的貢献が目指されていたといえよう。

和歌森において、「日本人の心性」の究明を通して、日本内地と東亜の統合を実現しようとする戦時下の研究の枠組みは、「民主主義社会」の建設を目指す戦後の歴史教育論に果たして継承されたのだろうか。以下で検討してみたい。

### 第三節 歴史教育論における地政学的配置

第二次世界大戦の日本の敗戦を通じて、戦後の和歌森は、「日本歴史」の「再建」を歴史家としての自らの責務と感じていた。敗戦一年後の1946年に和歌森は、「この國が戦ひに出たとともに、さういふ歴史もまた戦場に出て戦つたといひ得る。そして國が敗れたとともに歴史も敗

れた」と述べ、敗戦を国史学の敗北であるという認識を披歴している。「日本人の履歴書としての日本歴史が、新日本建設にあたり深く顧みられねばならぬ」というように、「日本歴史」の「再建」が歴史家としての自らの課題と感じていた<sup>16)</sup>。そのような決意の下に和歌森は、民俗学の知見と方法を参考にして、「たみのくらしのあゆみ」として新たな日本通史を創出することに自らの課題を見いだしていた。和歌森が、民俗学を手がかりとしたことは、彼の構想した日本史像にいかなる特徴を付与することになったのだろうか。さらに、戦時下において従事していた「大東亜文化研究」の枠組みは、彼が戦後に日本史像を構想する上で、いかなる影響を与えることになったのだろうか。

本節では、和歌森の歴史教育の構想における日本史像が、日本列島内部の様々な地域と、列島外部の諸外国又は地域を、それぞれどのように表象していたか、教科書叙述の検討を踏まえて明らかにしたい。その上で、日本史像に戦前の研究の枠組みがどのように投影されていたかを考察することにしよう。

#### (1) 列島内部の地政学

##### ① 教科書『日本の成長』に見る列島内部の日本史への統合と差別

教科書『日本の成長』を見るならば、1常に政権の側から歴史を描き、政権所在地以外は「地方」として一括する、2歴史を社会全体の発展過程として捉える、3アイヌや沖縄、在日朝鮮人や中国人に関する叙述を極力排除し、単一民族である「日本人」のみが「日本史」を構成しているかのように印象づける、という三点において、戦後の日本史教科書が日本史の一体性と連続性を強調する際に用いてきた常套的手段を共有している<sup>17)</sup>。

教科書『日本の成長』において独創的なのは、現実の「田舎」や子どもの「経験」が様々な歴史過程へと統合される点にある。以下に教科書の一節を引用しよう。

家庭生活の中心をなしていたものは、住居のなかの炉であった。炉辺は食事をしたり、一家がだんらんしたりする場所であった。・・・炉の火は、保温にも、炊事のかまどにも、照明にも用いられたわけであるから、はなはだありがたいものであって、これを神聖なものとして見ていたのである。

今でも、いなかには、炉の火を神聖なものとして、その上の自在かぎを火の神のシンボル、つまり、御神体のようにみているところがある。今日、かまどの神とか荒神さまとかいわれている家の火の神の源は、こういう炉

の神であった<sup>18)</sup>。

「たみのあゆみ」を描こうとした和歌森が、庶民の生活史をイメージ可能なものとして出来るだけ再現しようと苦心する様がこのような記述からもうかがえる。ここで和歌森は、原始時代の生活を想像するよすがとして、「いなか」の生活を用いている。いわば「いなか」は、「炉の火を神聖なもの」とみなす点で、原始時代を現代にまで遺している地域として表象されていたのである。

現代の社会生活の一面を日本史の発達段階の一階梯へと位置付けようとする記述は、この他にも教科書の中に見受けられる。例えば、「いなか」の「田小屋」が原始の「竪穴住居」を理解させるために、クラスにおける学級委員の選出の事例が古代社会に関する国家の発生を理解させるために、警察官の役割が武士の発生を理解させるために、それぞれ手がかりとして用いられていた。

このように、現実の多様な社会生活を日本史の展開過程に位置付けるという発想を支えているのは、民俗学の重出立証法であろう。そこでまず、和歌森による重出立証法の定義を簡単に押さえておくことにしよう。

## ② 和歌森における重出立証法

民俗学に関する最初の本格的概説書として1947年に刊行された和歌森太郎著『日本民俗学概説』において、重出立証法は次のように定義されている。

一つ民俗事実、民俗内容の類型をそれぞれの表象となる方言とともに数多く蒐めて、十分に相互比較をしあふうちに、どれからどれへ移つたかを知らうとする。民俗にしても、それにかかはる方言にしても、蒐めたものを並べて見ると、幾分か重なる部分があり、そのずれた部分に又一部重なるものがある、といふ風に写真式につながる合はせて行くことが出来る。かうして伸びた一連の民俗類型集が、そのまま民俗の歴史を描く、といふ風に考へて方法とする<sup>19)</sup>。

このような定義の背後には、「それぞれにすぐれた『一人』も所詮『国の人』として民俗である」「人は畢竟人間たるとともに、その国の人乃至民族であることをやめ得ない<sup>20)</sup>」と言われるような統一的で強固な日本人イメージに加え、単線的な発達史観が存在している。すなわち和歌森は、「文化度の低いものから高いものへの推移」こそが「社会史の通則」であるとする立場から「さういふ社会史的動きのどこに、一一の民俗が位置づけられ、意味をもたされてあるか」を通して「民俗史」を明らかに

すべきことを主張していた。個々の民俗を「社会史的動き」に位置付けるためには、「民俗の型を荷ふ協同体の文化度乃至社会型に照らして見ることが望ましい」という立場から、その民俗が存在している村落共同体の「文化度」を「古代型、上代型、中世型、近世型、近代型」の五つ、あるいは「前期、中期、後期」の三つの型に区分し民俗の進化の筋道を導き出そうとしたのである<sup>21)</sup>。「日本歴史」の「再建」を課題とする和歌森は、重出立証法を日本人の発展史を明らかにする方法として定義し、列島内部の多様な地域の民俗から日本人の民俗史を明らかにすることで、その課題を果たそうと考えていた。しかしそれは、列島内部の多様な民俗を、民俗史の発達段階に位置づけることで、民俗の個別性に対する配慮を低下させ、日本史を複数化するのではなく、単一化することへと向かわせることとなった。

## ③ 「経験としての歴史の教育」への重出立証法の受容

民俗学の重出立証法は、和歌森が執筆した教科書の記述のみならず、「経験としての歴史の教育」の学習方法にも取り入れられていた。和歌森は、「或る町の学校で、どのようにして交通の施設を整備し、交通能率をたかめるかという問題」に関する社会科学習を例にとり、その学習の進め方について、次のような提案を行った。和歌森によれば、「以前の統計とか古老の見聞談とかを通じて調べあげ、つまり歴史的にその郷土の交通という社会機能の実態が今日ある所以をとらえ」ることが必要であるが、これだけでは不十分である。重要なのは、あくまでも「日本人の交通発達の歴史」の中に位置付けることであり、その為には、各地の比較検討が必要であった。和歌森の言葉に即せば、「県内の各地域地域で、都会ではそれがどうか、町ではどうか、・・・被教育者の経験領域の及ぶ限りのうちでのあちこちでの今日の交通現象をとらえるようにする」ことを通して、地域間の相異を「日本人の交通発達の歴史における、より以前のタイプだとか、より進んだタイプ」だとかを理解することが重要であった。なぜなら、そのような理解は、「自分の町の交通状態はそのどういう段階のところにあるか」を把握し、「さきざきの実践の方向や方法もそこに或る程度つかみ出されることになる」ことになるからである。この交通に関する学習例は、和歌森が「経験としての歴史の教育」を説明する際に必ずといっていいほど用いていた点で、「経験としての歴史の教育」における典型的な学習例といえよう。

和歌森にとって重出立証法は、「上流一部の指導者支配者」の歴史ではなく、「常民」の歴史を明らかにし得る歴史研究法である点で、社会科学の学習方法に援用するにふ

さわしい方法と感じられたことだろう。しかし、重出立証法を歴史教育の方法として適用することを通して、列島内部の様々な地域をめぐる固有の経験は、日本史の中へと統合されて普遍化され、個別性を捨象されることになるだろう。さらにそれと同時に、発展段階の一過程へと位置付けることを通して、個々の「経験」に対する差別と抑圧を喚起することになる。交通に関する学習では、「日本人の交通発達史」の一段階に自らの村や町の「交通状態」を位置付けることによって、様々な村や町の序列化が進められることとなったのである。さらに先の教科書叙述の例でいえば、「いなか」の生活から原始時代を想像させることは、田舎と都会との地方差を、原始時代と現代という時代差へと還元しようとするものであった。田舎と都会という同時代に存在する地域の在り方の違いを、原始と現代との違いを説明する比喩として用いることを通して、日本史の連続的発達を印象づけると同時に、現実の村や町の違いが、発達度の違いとして一元化され、序列化されることで、「いなか」は原始時代に近い特徴を持つ未開な地域として、都会（正確には都会に住む人々）の田舎に対する蔑視の意識を正当化する機能を担うことになったのである。

以上のように、和歌森は重出立証法を通して、様々な地域における子どもの多様な経験を手がかりとして、日本史の連続性と一体性を生み出すと同時に、現実に潜む差別と抑圧を歴史叙述の中で再生産しようとしている。注目しておきたいのは、重出立証法による差別は、差別された当事者の意識の中に、一層強固な日本史像を浸透させる機能を担った点である。和歌森は言う。「郷土人の近代生活史が、日本人の全体的な生活史に対してどういう位置を占めるか、そこをはつきりつかませて、生徒たちの発奮努力を促すようではなくてはならない」<sup>23)</sup>。差別の克服を目指す人々の「発奮努力」が、例えば「交通発達」の開化すなわち都市化へと向かうならば、差別を生み出す源である「日本人の常民生活史」は、人々にとってますます自明なものとなるに違いない。かくして、和歌森の歴史教育は、「日本人の常民生活史」の中へ個々の村や町を序列化することにおいて、個々の村や町への差別を生み出すと共に、その差別を媒介として「常民生活史」を子どもの意識の中により深く浸透させることに寄与しようとしていたのである。

## (2) 列島外部の地政学

次に和歌森の歴史教育論において、日本と列島外部、特にアジアとの関係がどのように描かれていたか検討してみよう。「たみのあゆみ」として日本通史を描くことを

理想とした和歌森の『日本の成長』において、対アジア関係は、原始・古代では主に文化交流の側面から、中世・近世では経済的交流の側面から描かれ、政治的側面からの描写が極めて少ない点において特徴的であった。例えば、古代の渡来人については、

大和国家の権力の強まるにつれて、朝鮮や中国の南部と交渉が深くなったから、それらの文化とともに、養蚕や、はたおり・裁縫のすすんだ技術も伝わった（『日本の成長 上』p.39）

と記され、文化的交流が強調される一方で、当時の日本が中国の政治的影響力の傘下にあったことには触れていない。また、中世以降では、「ことに足利氏は、自分の財源を求めるために、明という王朝が支配していた中国と、積極的に交際を求めた」（『日本の成長 下』p.4）ことなど経済交流が強調される。ここでも朝貢貿易であったことが隠された上で、あたかも対等な交易が展開したかのような記述となっていた。

ただし、文化や経済に注目して「たみ」同士の交流として対アジア関係を描き出そうとする構想は、和歌森の教科書『日本の成長』のオリジナルな着想ではなかった。そのような構想は既に戦時下の1943年に刊行された『初等科国史』の対アジア叙述の中に見出される。すなわち、『初等科国史』では、古代において文化交流を重視し（例えば「孝謙天皇の御代に、いよいよ大仏ができあがると、盛大な儀式がおこなわれ、全国から一万の僧が集まったほか、はるばる支那やインドからも、名僧が参列しました」<sup>24)</sup>といった記述）、さらに中世・近世になると、経済重視の対外叙述（例えば「南蛮船」「八幡船」の活躍、「日本町」の建設等）を行っていた。

ここで注目しておきたいのは、『初等科国史』が古代から近世までの対アジア関係を文化・経済的側面から描いたのは、東亜の盟主という、近代における日本の政治的使命を正当化するためだった点である。すなわち、文化経済的側面からの交流を強調したのは、「南方へ出向いた九州や沖縄の商人と、土地の住民との取引きは、きはめておだやかに行はれました」という記述に見られるように<sup>25)</sup>、友好的な東亜での交流が古代から一貫して存在することを子どもに印象づけるためだった。そして古代からの東亜の友好関係を前提とし、東亜の友好を脅かす存在として「ヨーロッパ人」（近代以降は「米・英」）を描き、米英による東亜への侵入を守る盟主的存在としての日本の政治的使命を根拠づけることが可能となっていたのである。

ところで、『初等科国史』のモチーフとなっていた大東亜共栄圏構想が崩壊した戦後においても、共栄圏構想の枠組み自体は、和歌森にある程度共有され続けていたことを指摘しておく必要があるだろう。和歌森は、歴史教育の意義として、「日本人が歩んできたあとが、どれだけ世界性を持ち得るか、その心性や能力がどれだけ世界的に通じ貢献し得るものか。そういうことが、或は東亜の世界史のうちで、或は欧米世界史のうちで回顧吟味されねばならない」ことをしばしば指摘している<sup>26)</sup>。「東亜の世界史」と「欧米世界史」に二分する枠組みは大東亜共栄圏構想に由来するものであり、さらにそれらの世界史において日本人の「心性」の「貢献」可能性を問う枠組みは、第二節で触れた国民精神文化研究所での「東亜宗教工作」に近似している。だとすれば、『初等科国史』と『日本の成長』が、対アジア関係を共通の観点から描いたことの少なくとも一端は、大東亜共栄圏構想の一環として実施された「東亜宗教工作」の枠組みの残滓が、和歌森の中に未だ存在した点に求めることができよう。

ただし、『日本の成長』を記す際の和歌森は、新たな民主主義社会の建設を願う立場にはっきりと立ち、大東亜共栄圏構想を評価するような記述を行うことは決してなかった。そのために、逆説的な言い方ではあるが、和歌森の教科書では、古代から近世にかけて、なぜ政治的側面からの記述を避け、文化や経済的側面からの記述を重視するのかが読者に不明となっている。「民主主義の社会に、いろいろのしくみを変える」という戦後社会の課題にしても、1910年代以降の軍部の台頭と独走の過程を描いた第八章「太平洋戦争はどのようにして起ったか」の記述のみによって根拠づけられていた。古代から近世にかけての個々の文化的交流や経済交易は、ばらばらな歴史的事実として提示され、それらの事実を統合し得るビジョンが教科書に示されることはなかったのである。

以上のような『初等科国史』と『日本の成長』との連続と相違を、別の角度から眺めるならば、『初等科国史』に見られた、アジアとの連帯と対話の手がかりとして日本史を語るという意志は、『日本の成長』から失われ、内地日本人向けの独話として日本史が語られるようになったことを指摘することができよう。大東亜共栄圏構想は、日本の侵略的意図を隠べいするために、アジアにおける共栄という課題をアジアの諸民族に訴えようとするものであった。さらに『初等科国史』は、台湾、満州、韓国など、大日本帝国の事実上の統治下にある人々の教育にも用いることが想定されている。つまり『初等科国史』で語られる日本史像は、教科書編纂者の意図からすれば、内地日本人のみならず、台湾など統治対象となった外地

日本人にも共有しえる歴史として提示された側面があった。

しかし、戦後に刊行された『日本の成長』では、日本史像はあくまでも内地の日本人が習得すべきものとして提示されている。例えば教科書『日本の成長』は、その序文の中で編纂の趣旨について次のように中学生に呼びかけている。「日本人の歴史の場合、封建時代でも、古代でも、そこに展開した事象がいろいろな意味をもって、今日のわれわれの生活にひびき、つながりをもっている。・・・そこで、日本人のそもそもの始まりから、今日に至るまでの社会発展のあらましを、時代を追って、この教科書は説いたのである」。ここで筆者と読者を含む「われわれ」は、古代から連綿と続いてきた「日本人」であり、アイヌや沖縄、在日朝鮮人や中国人ははじめから排除されていた。教科書で描かれる日本史像は、内地日本人向けのモノログとして産出され受容されていくことになったのである。よって、列島外部のアジアの人々に対する表象は、独自の存在という視点からではなく、日本に便益をもたらす存在という視点から行われた。例えば古代における中国との文化交流も

大陸からは多くの帰化人がきて、日本人の間にもその技術をひろめたとともに、皇族や豪族のために、製作品を多く提供するものとなった。かれらは部というものになって、支配者のために奉仕したのである(『日本の成長上』p.41)

という記述のように、中国文化は、日本への寄与という観点から問題にされたのであり、中国の文化を他者の文化として尊重した上で、列島内部の人々と中国大陸の人々との文化交流を描こうとする視点は希薄だった。

このようにして和歌森の歴史教育論は、民俗学の受容を通じて、列島内部に居住する様々な個別性を備えた人々を均質な日本国民へと置き換える一方で、「大東亜文化建設研究」の枠組みを継承しながらも、それを語るべき列島外部の相手を喪失する中で、日本史像は内地日本人向けのモノログと化し、アジアの諸民族の他者性を希薄なものへと変えてしまうことになったのである。それらを通じて和歌森は、個人史の独自性を保障し、いかにして複数の日本通史を創造するかという、自らの民主社会像から導かれる歴史教育の課題を、自身の手で放棄してしまうことになった。



## 終わりに

本稿を閉じるにあたり、これまでの検討を通して明らかにし得たことをまとめた上で、和歌森の歴史教育の構想において民俗学がどのように受容されていたのかを、1930年代に民俗学を受容した郷土教育実践との対比において、改めて考察してみたい。

和歌森は、「経験としての歴史の教育」と「展望としての歴史の教育」という二つの歴史教育を提唱して個人史と共同体の歴史（日本史）とをいかに折り合わせるかを摸索することで、個と全体との調停を目指す民主主義社会にふさわしい歴史認識を子どもに獲得させようとしていた。しかし、民俗学と「大東亜文化建設研究」という二つの地政学を歴史教育論の中へと継承することを通して、和歌森は、連続的で一体的であり、しかも内地日本人にしか受容しえない日本史像を構築し、それを子どもに付与しようとするようになったのである。

以上のような和歌森の歴史教育論における日本史像は、以下のような点において、戦後、民俗学者が構想した社会科教育論の代表的日本史像と見なしえる。歴史学を専攻したこと、戦時下に国民精神文化研究所に参与したことなど、和歌森が民俗学者としてやや特異な経歴を持ったことは確かである。しかし同時に注目する必要があるのは、彼が戦後の民俗学界において担った位置である。1949年に民間伝承の会を改組して成立した日本民俗学会で理事に就任、1956年には代表理事に選任される等、和歌森は1950年代から60年代にかけて民俗学界を代表する立場にあった。彼の民俗学の重出立証法に関する定義は、民俗学者内部で様々な異論が提出されたものの、『日本民俗学概説』『日本民俗学』などの概説書の刊行や、1950年代以降に出版された民俗学に関する各種講座ものの「研究方法」に関する論説の多くを和歌森が担当することで学界の一般的見解として人口に膾炙していった。

さらに和歌森太郎は、社会科でも民俗学者をリードする立場にあった。1948年11・12月合併号から機関誌『民間伝承』に設けられた「社会科の頁」の編集を担当し、さらに成城学園初等学校で開発された「柳田社会科」をもとにして、民俗学研究所の所員が執筆した小学校社会科教科書『日本の社会』の編纂も、出版社の選定などで主導している。特筆すべきは、教科書『日本の社会』の理論書とされた、柳田国男と和歌森太郎の共著による『社会科教育法』（実業之日本社、1953）が実は和歌森太郎の単独執筆であったことである。これまで、柳田の社会科論を検討した研究者は、この『社会科教育法』を重要なテキストとして扱うことを通して、和歌森の社会科論を

柳田の社会科論と見なしてきたのである。

国民国家が、国民を統合する歴史物語を必要とするのだとすれば、戦後の民俗学は、「たみのくらしのあゆみ」を構成する知見とそれを創出するための方法とを歴史教育に提供することを通して、国民教育の内容と方法を提案するという課題に正面から取り組むことになった。そのような課題は、戦時下における政策学への転換を経た民俗学が、戦後新たに直面した課題である。以前筆者は、1930年代に民俗学を学校教育へ受容しようとした小学校教師竹内利美や宮本常一らの実践を検討したことがある。自らも民俗学を研究していた竹内や宮本にとって、民俗学は、村における学校教育と日常的な「教育現象」との対抗関係を対象化する手段であった<sup>27)</sup>。また、彼らは民俗学の視点を媒介して、学校教育において見失われている教育の概念を取り出すことに成功していた。例えば宮本の場合、かつての庶民教育における「旅」や「物語」が果たした役割に注目し、共同体間を移動することや物語を通じて象徴的な世界観が獲得することが、学校教育の学習の概念から欠落していることを問題とし得た。さらに注目しておきたいのは、竹内や宮本の実践においては、同一村落でも部落ごとの、さらにいえば同一部落でも家ごとの、微細な民俗の差異に徹底してこだわっている点である。彼らが子どもに作成させた村の民俗誌は、ほぼ全員の子どもの家の民俗を取り上げることを通して、同一行事でも、部落ごと、さらには家ごとがいかに伝承が異なるかを開示している。竹内や宮本においても、民俗学を通して日本人の民族性を子どもに教えたいという希望はあった。しかし子ども達と共に村の内部を調べれば調べるほど、その民俗の微細な違いに改めて気づかざるを得なかったのである。

1940年代後半以降においても、民俗学を通して村の現実や学校教育を対象化し、さらに村内部の微細な民俗を見分けようとする視線は、群馬県の中学校教師都丸九一の実践などに継承されていた<sup>28)</sup>。しかし和歌森ら民俗学者の議論の焦点は、「国民教育」にふさわしい教育内容と方法を民俗学によっていかに準備するかに置かれている。和歌森らにおいて、村の現実や学校教育を民俗学によって対象化しようとする意欲も、さらに村内部の微細な民俗の違いにこだわろうとする志向もほとんど見られなかった。

個と全体との調停を目指す民主社会にふさわしい歴史認識をいかに獲得させるかという和歌森のそもそもの課題を追求するには、竹内や宮本のように、村や学校の現実を相対化しえる視点や村内部の民俗の微細な違いに鋭敏な感覚を、保ち続ける必要があったのではなかったか。

村や学校における「国民」創出の回路を相対化すると同時に、個々の民俗の固有性へとこだわること、これらの作業が個を「全体社会」へと回収してしまうことなく、個の独自性を極力保障しながら、「公共社会」をいかに準備するかという和歌森の課題に答え得たのではないかと思われるのである。

しかし、戦時下において民俗学が民族文化の究明を重視する政策学へと転換していたこともあって、1940年代後半以降、和歌森を始めとする民俗学者は単一の国民の歴史を学校教育を通して子どもの意識の中に浸透させ、日本人としての文化的同一性を改めて喚起することに関心を持っていた。その中で戦後の民俗学者は、彼らが1930年代まで持っていた、村において錯綜している様々な教育現象や民俗の違いを微細に見分ける差異の感覚を、戦後の学校教育に活かす回路を喪失していったのである。

(指導教官 佐藤学教授)

付記：本研究は、平成九年度文部省科学研究費（特別研究員奨励費）の助成による成果の一部である。

## 注

- 1) 1915年生まれ。東京文理科大学卒業後、東京教育大学文学部長を経て、都留文科大学学長。古代史・中世史専攻。1977年没。
- 2) 「社会科と歴史教育」『和歌森太郎著作集13』p.322（初出は1947.4）。
- 3) 1947年版学習指導要領は、中学校において一般社会科と国史料を併設していた。
- 4) 『和歌森太郎著作集13』弘文堂、1982。
- 5) 梅野正信「歴史教育独立論と『社会科歴史』論」『史潮』第22号、1987.11。
- 6) 『和歌森太郎著作集13』pp.298-99。
- 7) 「社会科と歴史教育」『和歌森太郎著作集13』p.318。
- 8) 和歌森『歴史教育論』pp.26-66、金子書房、1950。
- 9) 『民間伝承』p.1, 1943.4
- 10) 福田アジオ『柳田国男の民俗学』吉川弘文館、1992。同「人間・生活・文化と歴史教育」『講座・歴史教育3』弘文堂、1982。
- 11) 『国民精神文化研究所要覧』p.72, 1942。
- 12) 増田福太郎・堀一郎『東亜宗教の課題』pp.52-58、国民精神文化研究所、1942。
- 13) 波多野澄雄『「東亜新秩序」と地政学』三輪公忠編『日本の一九三〇年代』p.16, 1980, 創流社
- 14) 川村湊『「大東亜民俗学」の虚実』p.11, 講談社、1996。
- 15) 清沢芳郎「民俗調査のことなど」『塩尻教育』4号, p.119, 1975.3
- 16) 和歌森「再建さるべき日本歴史」民俗学研究所編『民俗学新講』, 明世堂, p.94。
- 17) 例えば、ましこひでのり『イデオロギーとしての「日本」』p.178, 三元社, 1997。
- 18) 『日本の成長 上』pp.15-16
- 19) 「日本民俗学概説」『和歌森太郎著作集9』p.32。
- 20) 前掲書, pp.8-9。
- 21) 前掲書, pp.36-38。
- 22) 和歌森『歴史教育論』p.43。
- 23) 前掲書, p.47。
- 24) 「初等科国史」『日本教科書大系 近代編 第20巻』p.265。
- 25) 前掲書, p.299。
- 26) 例えば、和歌森「歴史教育における社会科と歴史科」p.60『社会と学校』1948.4。
- 27) 拙稿「国民教育と村の『教育現象』—民俗学を受容した竹内利美の小学校実践を中心に—」日本民俗学会『日本民俗学』211号, 1997年8月。拙稿「昭和初期郷土教育における民俗伝統への接近—宮本常一の教育実践に注目して—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第35巻, 1995年。
- 28) 拙稿「戦後社会科における民俗学的方法の位置—都丸九十九—における『村がら』の認識をめぐって—」日本教育学会『教育学研究』第61巻第2号, 1994年6月。